

05・つる系触手に縛り上げられて、乳首をねちねちマツサージされながらガチクンニでイカされる

本編『04・一晚中セックスした後、なぜかお金をもらって契約終了させられそうになったので断る』から一時間と少し後。  
とある年の春。

五月上旬。朝十一時過ぎ。

場所はミネルヴァの屋敷内、実験室。

天気は晴れ。室温は二十四度程度。

意図がわかるのが恥ずかしいところだが、ミネルヴァが少し室温を上げてくれたようだ。

部屋はとても広く、主人公は中心にいる。

そこは石でできた一見冷たい印象の部屋だが、ミネルヴァの作った魔法装置のおかげで、快適な気温に保たれている。

## SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【部屋の外の音を、部屋の中から聞いている】

【0―5秒ほど流して『ミネルヴァ』のセリフ】

【その後、音量が小さくなる】

【ごく小さな音量で流す】

【トラック終了まで流し続ける】

〈主人公〉

「……えーつと……。」

これって、どういう事なのかしら」

主人公、少し前とはうって変わって、随分高いところからミネルヴァを見下ろす、いや、正確には『見下ろさせられる』形で話しかける。

一時間と少々前。気になっている人、いや、既にだいぶ好きになっている人に『あなたの喜ぶ事をしたい』と宣言されてドキドキしていたら、なぜかそのまま朝食が始まった。『一体食後に何をされてしまうのかしら』とワクワクそわそわしながら食べたものの、一向に何も起こらず、おなががこなれてきた頃に、今度は再び実験室へ連れていかれた。

なので『なんだ。結局このまま普通に仕事するのかしら』と思い始めた所で、部屋の外から突如這い出してきた植物に両手首を持ち上げられたかと思うと、みるみるうちに天井から吊るされた。

こんな事をされて、『これって、どういう事なのかしら』と聞かずにいられるだろうか。いや、いられまい。

……正直な所、こうなってしまう原因に身に覚えがあるかないかと言えば、ある。しかし、相変わらずミネルヴァのやる事には脈絡と説明がなさすぎるのではないか。それでも、事前に『これから貴方のしたい事をする』と言っただけ進歩しているのか？いや、していない。進歩した人間は、突然人を縛り上げない！

### ▲ ボイス加工あり

〔1. 5メートルほど遠くで聞こえる〕

### ● 正面 30センチ

「【※息づかいのみ※】で表現する。

ぽかんと息をのむ。

『あら、再現するとこんな風になるのね』という感じで。

正直な所、始めはピンと来なかった。

目の前に広がっているのが『これが主人公の望むセックスだ』と確信があつてなお『このような感じでいいのかしら』と思ひながらやった。

だが、見ているうちにだんだん感想が変わってくる。

両手を上にあげさせられる形で手首を縛り上げられ、身動きが取れない主人公に、困つたように見下ろされるのは、ミネルヴァにとってなかなか刺激的な光景なので――

……。

【少しぼかんとしながら、素直な今の気持ちを述べていく。

ミネルヴァは心から、主人公のセックスに関する創造性に感服しているのです――

昨夜（さくや）『合っている』時に見た、貴方の夢を参考にやってみたのだけれど……。

【少し間をあけてから。

心から感心して。

その位、ミネルヴァは主人公の想像力に驚いているので。

当然『貴方はこういったセックスが好きな、いやらしい方なのね』と煽る気持ちはみじんもない。だが、主人公にはそう聞こえてしまう――

貴方って、こういうのが好きなのね。

とても想像力豊かだね。

【別の姿をした自分について述べる。

また、このような特性を持つ自分でも、まるで思いつかなかった行為を夢見る主人公の

想像力に、ますます感動している。

『こんな扱い方』とは『セックスの小道具としての扱い方』という意味」

私は、この身体とは別に、植物や石。

そして液体の身体をした自分を持っているけれど。

こんな扱い方、考えた事もなかったもの……」

〈主人公〉

「……それはどうも、ありがとう……？」

主人公、ミネルヴァのコメントに恥ずかしさ半分、あきれ半分で答えるが、いかんせん、引きつり笑いになるのは否めない。

わかつてはいる、ミネルヴァの事である。今日も思った事をそのまま言っているだけだ。ゆえに、心から感心されているのはわかる。わかるのだが、これでは『あなたは常日頃、いやらしい妄想ばかりしているのですね』と言われているのと同じではなからうか。

だから主人公はどう反応するのも恥ずかしくなってしまうて、ミネルヴァの目もろくに見られずにいた。

そのせいで、今言われた気がする、何やら重要な情報も素通りしてしまう。  
植物や石。そして液体の……生命体。クロエはそれらを『使い魔』と称していた気がする

るが……実際はミネルヴァ自身であつたという事だろうか。

……それにしても、まったく参つたものだ。

つい先ほどまでの主人公は、あんなにも素直に『ありがとう』も『ごめんなさい』も言えたのに、今はすっかり言葉が出なくなつてしまつた。

……確かに、この展開は唐突すぎる。

だけどそれにしたつて、これがミネルヴァの厚意によるものだとかっているのなら、自分はまだ少し何か言うべきなのではないか。

我ながらそう感じているのに……主人公はまたも自分の秘密を知られた衝撃で、ただだ『わたしは困っています』というポーズをとっていたのだ。

SE 2 ミネルヴァの足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいて、正面0センチの距離までくる】

●正面 0センチ

「【※1回※】キスする。

軽く触れる、じゃれるようなキス】

ちゅ♡  
」

そんな主人公に、ミネルヴァが挨拶代わりみたいにキスをする。

そうされると心のからまった部分がほどけていくような気がして、主人公はホツとする。だからもっともっとたくさん、息もできないくらいしてほしいのに。そうすれば、もっと色んな気持ちを伝えられる気がするのに。

せがもうとその背中や頭に抱きつこうとしても、腕はまったく動かせなかった。難儀である。

〈主人公〉

「……………」

しかし、冷静になるにつれ、この拘束行為には様々な配慮が施されている事に気づいた。こんなにしっかり固定されているのに、不快感がまるでないのだ。

今、主人公の手首に絡みついている『つる』は、しっかりと安定していてしなやかだ。細い緑の茎はすべすべでつやがあって肌触りよく、柔軟で。

また、よほど繊細な調節ができるのだろう。縛られていても、ちっとも痛みがない。こ

んな結び方があるのかと、素直に驚くほどである。

さらに言うと、このような固定のされ方ゆえに指は動かせる。

そこで試しにつるの先や近くの花に触れてみたら、それらはそっと握り返してきたり、ふわっと香りを漂わせてくれたりして、なんだかかわいらしい。その健気な仕草に、主人公はすでにこの植物がいとおしくなりつつある。

花の香りもとてもいい。

しなだれかかるように伸びた薄紫色の花からは、ほんのりと、だが既に知っている、あ  
のにおいがして。

だから主人公は思わず、

……そうか、ミネルヴァからする花の香りって、これだったのね。

そういえば、彼女の髪と同じ色をしているわ。

『植物や石や液体も自分』というのは、わたしには、どのような状態を指すのかよくわから  
ないのだけれど……。

この植物がミネルヴァ自身だって事には、なんだか納得がいったわ。

と、一人頷いてもいた。

服や気温の件でも思ったが、ミネルヴァはなかなか美しさと快適性にこだわるタイプの

ようだ。

この状況はこんなに不自由なのにドキドキして、そのくせどこか安心する。いかにもいけない事をされそうな格好にされて、居心地悪くはあるが、不安はない。それは主人公がミネルヴァに感じている信頼と同等の感覚に思えて、主人公は、少しづつ身の昂りを覚えていた。

●正面 0センチ

「ふと気づいたように。

『でも、よく考えれば無理もないわ……。主人公さん、いえ、誰かの想像力がどうこう以前に。私自身にまずこういった発想が欠けていたもの』と気づいたので」

……でもそれは、これまで私が、性的な事に関心が薄すぎたせいなのかもね。

【※1回※ キスする。

優しく触れる、ちゅぽとしたキス」

ちゅ

ミネルヴァ、『正面0センチ』の距離のまま『無声音ささやき』をする。

●正面 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「うっとり。少しだけ興奮気味に。」

ミネルヴァは、主人公の性的嗜好を完全に理解したわけではない。

また、なんとなく淋しいので主人公には伝えていないが『合う』術もすでに解け、主人公の身体の機微も今はわからない。

だが『この状態の主人公を見てドキドキする』『主人公もドキドキしてくれているようだ』という気持ちは感じているので」

貴方が私のする事で、こんなに呼吸を荒くして、目を潤ませて。これから起きる事に、期待を隠し切れない様を見せてくれると。

私も嬉しくて、昂ってしまふもの……♡

【※1回※ キスする。

優しく触れる、ちゅぽつとしたキス】

ちゅ♡

【うっとり。

意識して優しく言う。

実のところもう興奮し始めているが、それを押し出すと、主人公に恐怖感を与えかねない、ミネルヴァでもわかるので」

安心してね。

貴方が嬉しい事しかないから。

【※9回※ キスする。

優しく触れる、甘々なキスから、次第にねっとりしたディープキスに移行していく】

んっ……ちゅ♡

ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡

んんっく……ちゅ♡

れえろっ……ちゅっ♡※

〈主人公〉

「んっ……♡」

するとミネルヴァが、主人公が今考えていたのと同じ単語を言って、またキスをしてきた。

それは両頬を両手で包まれて、じっくり舌を入れられる、ねっとりしたキスだ。

口づけを交わす度に主人公の頭は小さく揺れ、その度に花と草の存在を感じる。

やっぱりこの光景は、拘束セックスにしては少々ロマンチックすぎる。

一般的に、植物に捕らわれて犯される様を想像する場合、腕は力任せに固定されるせいで絶対に痛くて。

植物はもっとグロテスクで粘り気があって、こちらへの思い遣りなんて絶対になくて。

ただ欲望のままに潰しに来て、吐き出してくるのがお決まりだろう。

……少なくとも主人公の空想の中ではそうで、あの夢も、それをそのまま反映したものだったはずだ。

であるにもかかわらず、この花にはそういった要素がまるでない。

ただただ優しく包み込んでくれて、何もかも善意でこうしてくれている事を、このほんの短い間にも強く実感させてくる。

それは、ミネルヴァには本当に『そういった発想がない』からで。

それから『この花自体が、そもそもそういう生き物ではない』からであり。

そして本当に……『嬉しい事しかない』と決めているからだろう。

つまり彼女は、これまでそういった発想がなかったのに『今、初めて』『主人公の為に』しようとしてくれている。

そう思ったら主人公はもう、こんな事になっているのに胸がいっぱいになってしまつて……まだキスしかされてないのに、もう泣きそうになった。

〈主人公〉

「……ところで」

●正面 0センチ

「優しく続きを促す」

うん？」

だが、泣いているわけにはいかない。

疑問があるのなら、すぐに質問。

これはミネルヴァと付き合っていく上での鉄則である。

ひとまず主人公は、今ある謎について、早速尋ねる事にした。

〈主人公〉

「そんな事も、できるの？」

『合う』術っていうのは……」

●正面 0センチ

「『ああ、その事があったわね』『その質問で思い出した』という感じで。

例のごとく、ミネルヴァとしてはものすごくテンションが高いのだが、『少し関心がある』程度の反応にしか聞こえない」

ああ……。

【少しだけ前のめりにはしゃいで。

なんだか嬉しそうに。

『そうそう、そうなの。私も驚いたの』と言っている感じで。

主人公が自分について質問してくれる事がとても嬉しいし、この件については特に話したいと思っていたので」

そう。そうなの。

そうみたい。

【夢の中まで入っていける事については知らなかった事、これまでこの術を使った時の出来事を話す。

しかし、嬉しくてしゃべりすぎるあまり、不穏な方向へ行きかける】

実はね、私も知らなかったの。

これまで、こんなにも長時間『合った』程相性の良い方はいなかったし。

これまでは、本当に治療目的。

『合った』感覚も、痛みや……

【『不快感や強い拒絶感』と言おうとしてやめる。

この情報を話しても、主人公を悲しませてしまうだけだと、ミネルヴァはわかるので。ミネルヴァはこれでも、彼女なりに非常に努力している。

その結果、昨日よりも格段に、主人公の気持ちをとともよく考えながら行動できるよう

になつてきたので」

うん。そういう、辛い感情しか共有する事が出来なかったから」

〈主人公〉

「ふー……ん？

そうなのね」

……つまり、ミネルヴァ自身、予想外の出来事というわけかしら？

主人公、一応要旨は理解したものの、ところどころ謎が残る説明にひとまず頷く。

しかし、これ以上質問、あるいは心配したところで、進展は難しそうだ。どうやらこの件は、ミネルヴァにも説明のつかない事案らしいからだ。

……それにしたって、とんでもない話である。

今も『合っている』のか、その辺はよくわからない。

だが、少なくとも、その間は夢の中まで覗かれるのなら、こちらはおちおち眠れもしないではないか。

せめて夢で会えるなら文句も言えるだろうが、一方的に見られるだなんて、たまったものじゃない。

……うん、そもそも、またあの術を使われる機会などはない気がするけれど……。

『もし、また繋がれたのなら、とても幸せな時間が過ごせる気がする』なんて、わたしは決して思っただいじゃないわけだけれど……！

と、主人公がついドキドキしていると。

### ● 正面 0センチ

「【自然に軌道修正する。

過去の『合った』時の事を思い出すとミネルヴァも悲しくなるが、今はもっと、主人公と幸福に繋がった経験の事を話したいので」

だから……昨日は本当に驚いたし。

夢の世界まで繋がってしまった時も、すぐに貴方の夢だとわかった。

だから本当は……」

ミネルヴァが続ける。

ミネルヴァ、『左0センチ』の距離に移動して『無声音ささやき』をする。

●左 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しく、嬉しそうに、そつとささやく。」

もう、先程の辛い思い出の事は忘れてしまっている。

目の前の主人公への愛情でいっぱいなので」

目が覚めた後、是非、すぐにしてあげたいと思った。

拘束されたまま、沢山気持ちよくされる夢。

貴方の解消しきれていない欲求が、こんな夢を見せているのだろうと解釈したから」※

〈主人公〉

「……………」  
♥

その時主人公が口ごもったのは、恥ずかしかったからではない。

ミネルヴァがこれを、心から主人公の為にしてくれているとわかったからだ。

彼女の優しさは一風変わっているだけでなく、ちよつと際限がなさ過ぎる。

まだ出会って二十四時間もたない主人公に、ここまで献身的になるなんて。

いくら主人公が哀れだったからといって、多数派の対応ではないだろう。

だから主人公は、時々、かえってその真意が読めなくなる。

今もこの、こんな行為は。『主人公の事が特別だから』してくれているのか。

それとも『困っている人がいれば、誰にでもこうするのか』わからないからだ。

前者だったら嬉しいが、そこまで気に入られるほどの事をした覚えがない。

後者ではないという状況的証拠はあるが、それは性に関する話だけだ。

彼女の口ぶりからして、これまでもリスクのある術を安売りしながら人助けをしてきたのだろう事は想像がつく。

だから主人公は聞きたくて、聞けなかった。

——ねえ、あなたって、これまでどんな風に生きてきたの。

あなたはわたしとの行為を沢山『はじめてだ』と言ってくれたけど。

『合って』気持ちよかったり嬉しかったりする事が初めてというなら、それは今までこの術を、痛い事や苦しい事ばかりが返ってくる使い方をしてきたという事でしよう。

……それなのに、どうして。

そんなにも人のために身を削ってきたあなたは、今、どうして一人でいるの？

あなたの生き方を分かち合おうとした人は、これまでにいなかったの？

それとも、どこかへ行ってしまったから、一人になったの？

わたしの知るあなたと、周囲の方々がささやくあなたの噂は、あまりにも乖離している。

友達からの情報さえ、一部は間違っていたと先ほどわかってしまった。

一体、あれらはどこまでが本当なの。

どれも誤解なら、そう受け取られるようになったきっかけは、なんなの。  
あなたはどうして、わたしにここまでしてくれるの。

それは、わたしが――……。

それらはきつと、聞いたら教えてもらえるだろう。

でも、主人公は聞けなかった。

もし勇気を出して尋ねて、自分に都合の悪い答えが返ってきたら。主人公は間違いなく傷つく。

だから怖くて、聞けなかったのだ。

〈主人公〉

「……じゃあ」

● 正面 0センチ

「優しく続きを促す。

主人公の言葉は、一つとして聞き漏らしたくないので」  
うん？」

〈主人公〉

「じゃあ。もっとキスして……？」

結局口にできたのは、そんな安易なおねだりだけだ。

わかっている。いくら触れるコミュニケーションが急速に心を近づけたところで、そこには限界がある。結局は言葉や、もっと別のやり方で距離を縮めていくしかないのだ。

つまり主人公は、最終的には聞くべきなのだ。

『あなたにとって、わたしは何？』と。

●正面 0センチ

「※息づかいのみ※」で表現する。

とても嬉しくて息をのむ。

主人公の要望が、あまりにもかわいらしいものだったので

……♡

【穏やかに、でもとても嬉しそうにうなづく】

ええ……♡

【※6回※】キスする。

ゆっくと。

リクエストにたっぷり答えるような、甘々なデープキス」

ちゅ♡ ちゅ♡

くちゅっ……♡

ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡

SE3 蔓がしなる音

【最初から最後まで流す】

【次の『ミネルヴァ』のセリフと重ねて流す】

●正面 0センチ

「※7回※ キスする。

ゆっくと。

リクエストにたっぷり答えるような、甘々なデープキス」

んっふ……ちゅ♡

ちゅっ♡ ちゅっ♡

んうう……ふ……ちゅっ♡

【穏やかに、でもとても嬉しそうに微笑む】

ふふ。

「いとおしそうに。」

心からの感想が八割、残りの二割が『主人公さんの興奮を助けそうな事を言ってみせるわ』という気持ちの割合で話す。

ミネルヴァは昨夜例の夢を見て、よくわからないなりに様々な感情に襲われた。

主人公がなぜ植物に欲情するのか、ミネルヴァにはピンとこない。

ミネルヴァからしてみると植物は自分自身の一部だ。ゆえに『主人公は、ミネルヴァの髪の毛に犯されたがっている』といったような受け取り方になるからだ。『手や口ではないけど髪に犯されたがっている』といったような受け取り方になるからだ。『手や口ではないけど髪に犯されたがっている』

だが、このシチュエーションに対する主人公の情熱は感じた。あまりにも気持ち良さそうなので『主人公さんが嬉しそうでよかった、彼女にとって、これはとてもいい夢みたい』と思うとともに、なんだかもやもやした。ミネルヴァは無自覚のうちに夢の中の植物に嫉妬したのだ。

だからミネルヴァは夢の一部始終をじっくりと観察した。舐めるようにじっと見た。

その結果『なるほど。主人公さんは、なんだかよからぬものに無理やりされるのがお好きみたい。好きというか……もちろん実際にされたいというわけではみただけだ。セックスがらみの空想の一つとして、とてもお気に入りみたい』という、最低限の情報を読み取る事に成功した。昨夜の主人公との行為は、ミネルヴァに性への理解を大きく促した

のである。

だからミネルヴァは、無性に、無自覚に張り合いたくなかった。『そういった事なら、私にだってできるわ』『こんな乱暴なやり事をする方には負けないわ』という気持ちである。

ミネルヴァには『空想の世界限定で、乱暴にされてみたい』というセックスファンタジーが勿論理解できない。強引だったり攻撃的だったりするやり方を『単純に技術が低い』と解釈しているのだ。

という事で実際にやってみる事にしたが、先程仕上がったものを見て『うーん……あれとは何かが違うわ。これでご満足いただけるのかしら』と、少し不安になった。

そこで『つまり『よからぬもの』の要素が足りないのね。では、私がそれになりましたよ。そうね……可愛いお姫様を捕まえてきた、悪い魔女の役なんてどうかしら』という結論に至った。

ゆえにここで『お姫様』という単語が再度引き出されるというわけである。

ミネルヴァは自分の一部を使って主人公好みの『ごっこ遊び』ができる事がとても嬉しく、わくわくしているのだ。

ミネルヴァは『夢の中の植物と自分のそれは、何かが違う』と感じた主な要因が、己の優しさや配慮の結果だとは気づいていない」

……可愛いお姫様ね。

『夢で見たから』なんて理由で、急に縛り上げられて、吊るされているのに。

キスをおねだりするなんて。

【※3回※】  
キスする。

優しく触れる、甘々なキス】

ちゅ♡  
ちゅ♡  
ちゅっ♡

主人公

「ん  
ー  
っ  
……」

その背に腕を回せない代わりに。

主人公は口を開けて、自ら舌を当て、伸ばして、ミネルヴァを感じようとする。

その度に全身がふわふわして、胸の奥が高鳴る。

だからもっと深くキスしたくて、無理に動こうとする。

そのせいで身がよじれる度、蔓が支え直してくれ、ぎゅっと包むように守ってくれる。

その度に身体を中心は、幾度となくきゅんと締め付けられた。

それから思う。

……こんな自分が『お姫様』なんてありえないと。

現実の主人公はただの貧しい田舎娘で、弱みを見せたくないから強気にふるまって、訛りを隠したいから気取った話し方をしているだけのまがいものだ。

際立つような容姿も、品性も。

他者に好かれるような人柄も、豊かな人間関係も、お金も、何もない。

唯一のよすがだった頭とそれを生かせる場所からは、もう転げ落ちてしまった。

そんな主人公を、ミネルヴァはずっと特別な存在のように扱う。

だから本当は『どうして』と叫びたい。

『どうしてわたしなの』などと、答えを見つけられなさそうな問いかけをして困らせて。

納得のいく答えが得られるまで甘え続けたい。

だけど、できないから。

主人公はキスに没頭する事で、泣くのを必死でこらえていた。

ミネルヴァ、主人公と会話をするために、覗き込むような姿勢で少し離れる。

### ● 正面 30センチ

「優しく、でも少し不安そうに尋ねる。

単純に気になって聞いているのもあるし、主人公に現状の感想を聞きたいというのもあるのだ」

ねえ。縛る強さはどう？

気を付けてはいるのだけど……痛くはない？

【少し恥ずかしそうに、ドキドキと。

これはぜひ、主人公に知っていてほしい情報なので。

また、自分と植物はこういう関係性なので、もし乱暴に扱われたり冷たくされたり嫌がられたりすると、ミネルヴァとしても悲しいので」

先程申し上げた通り……この植物はね。

私から切り離されてはいるけど、私自身なの。

いかようにも調節できるから、何なりとおっしゃってね」

そんな主人公に、ミネルヴァが質問と補足をする。

主人公はその声に我を取り戻しつつ、

——だからこの花って、こんなに安心するのね。

縛られてるはずなのに、怖いどころか、ずっと抱きしめられてるような感覚があったのは、そのせいだったのね……。

と、ますます涙腺が緩んできたが、そうすれば、『嫌がっている』ととられかねない。

主人公は大きく深呼吸をすると、涙声で答えた。

〈主人公〉

「……うん。凄いのね。

まったく動かせないのに、ちっとも痛くない」

●正面 30センチ

「【穏やかに微笑む。

だが内心では、ものすごく安心している。

とても気になっていたので、心の大きな荷が下りた気分。

もし痛がられたり本気で拒絶されたりしたら、ミネルヴァはとても傷つくので」

「……よかった」

〈主人公〉

「これは、あなたが、とても気を付けてくれているからなのよね。

……その。

ありがとう……」

●正面 30センチ

「むらっと、当たり前のように。」

実際問題ミネルヴァにとってこれは『当たり前』の事なので」

とんでもないわ。大切な貴方の事ですもの。

ちゃんと聞いておきたかったの。

「少し間をあけてから。」

優しく、ふと気づいたように。

いつものミネルヴァらしく、急に話が飛ぶ。

『植物の自分を拒絶されるのではないか』という不安が去って、他のところに注意が及ぶようになったので」

ああ、そうだ……。

髪の毛とお化粧の事を忘れていたわね。

【※軽く、優しく息を吹く※】

息がかかった所に、そのまま魔法がかかるイメージで」

……ふっ……♡」

SE 4 ミネルヴァが主人公に魔法でヘアメイクを施す音

「最初から最後まで流す」

〈主人公〉

「……………」

そしてまがいものの主人公は、唐突に魔法をかけられた。

その途端、疲れた顔と髪はふわりと別のものになり、この瞬きのような間に化粧と、ヘアアレンジを施された事がわかった。

果たして今、自分がどのような姿になったのか。

鏡があるわけではないから、完全にはわからない。

だけど……視界に入る情報や、髪と肌に伝う感覚で、自分には不相応なほど美しく整えもらった事はわかる。

……間違いなく、とても素敵に思ってもらっている。

〈主人公〉

「……………」

こんな事をされたら、心はいよいよ決壊しそうだ。

泣けば、せっかくかけてもらったこの魔法を台無しにしてしまう。

そうわかっていのに、主人公は今にも泣き出したくなっていた。

●正面 30センチ

「優しく、とても安心した様子で。

また、ちよつと得意げに。

ミネルヴァとしては、かなり自信があるので。

今は『主人公の素材の良さを引き出す』プロデューサーの気分なので。

本当はミネルヴァは、主人公の意見を反映した上でヘアメイクをしたかった。ミネルヴァは誰でも、自分のしたい格好をするのが一番いいと思っているからだ。

今朝化粧道具とアクセサリをただ置いておいたのも『お好みでどうぞ』という気持ちの表れである。

だから、主人公の好みを聞けずに、自分の判断だけで施したのは少々残念ではある。

だが、それは今後改めて聞けばいいし、ひとまず今の服装と主人公の顔・髪に最適と思われる姿にできた事で、主人公の居心地の悪さも軽減されるだろうとは思った。

なので、ミネルヴァはかなり満足している。

ミネルヴァは、主人公が自分をお姫様扱いされる事にぴんと来ていなかったり、消極的な態度を取ったりするのは『単に、それらしい格好ができていないからだろう』と解釈しているのだ。

ミネルヴァからすれば、主人公は、服装等は関係なく、最初から可憐でただただ愛おしい存在だ。

だから誤解が解けた以上、極端な話ヘアメイクはしなくてもいい。

だが、主人公はそうはいかないらしいと判断したので――

はい、これでできたわ。とても可愛い」

ミネルヴァ、『左0センチ』の距離に移動して『無声音ささやき』をする。

●左 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しく、でもどこかセクシーに。」

ミネルヴァとしては、かなり頑張っている。

ミネルヴァとしては『さあ！ ここから悪い魔女をやるわ！』という気分なので。こうすれば、主人公の気分を高められると思っているので――

これで本当にお姫様ね。

……悪い魔女に囚われたお姫様」※

〈主人公〉

「……え？」

だから主人公が『貴方ってすごいよね。パーティーに行きたい女の子を助けた、童話の魔法使いみたい』と感謝の気持ちを言おうとしたら、ミネルヴァがまるで逆の事を言った。その言葉があまりにも承服しかねるものだったから、主人公は思わずその目を見る。だけどミネルヴァはまるでいつも通りで、微笑みさえ返してきた。

● 左 0センチ 『無声音』 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しく、丁寧に。でもどこかセクシーに。」

自分で考えてきた物語を、主人公に読み聞かせるようなイメージで。

ミネルヴァとしては『何が何でも、あの悪い植物さんに勝つわ!』という気分なので。並々ならぬ気合が入っている。

しかし、そのせいで、主人公が今あからさまに戸惑いを見せた事にも気づかない! そう、貴方は捕まってしまったの。

貴方をめちやくちやにしたがる、とても悪い魔女にね。

【そっとささやくように、特にセクシーに。

ミネルヴァ自身、かなり気合を入れて架空の物語をしゃべっているのだ。

だが、この二行については、主人公とミネルヴァの関係性を反映している! 運悪く彼女に気に入られたせいで、貴方はこうなってしまった。

そのせいで、骨の髄まで、蕩（とろ）かされる……♡

【少し間をあけてから。

さらっと元の口調に戻る。

あっさり普段のミネルヴァに戻って、ギャップを見せる感じで】

……あの夢は、そういう悪しき者に意地悪される夢だったでしょう？  
私もそうしてあげる。

【優しく、愉快そうに楽しげに。

だがそれがまたセクシーに聞こえる感じで。

だが実際は『言ってしまったわ！　これであの悪い植物さんにも負けないはず！』と、  
内心きやつきやと得意になっている。

そのせいで、主人公が今にも泣きそうな事にも気づかない】

ふふ。後悔して逃げ出すなら、今のうちかもね。

【※耳舐め※　をする。

優しくねっとり、ダメ押しのように舐める。

今のミネルヴァは『悪い魔女』なので】

ああんむ……れろっ……ちゅっ♡」※

〈主人公〉

「……逃げないわよ……」

その笑顔を見ていたら、声を聞いていたら、主人公は苦しくて、息もできなくなった。さっきまでのときめきや興奮は失せて、心は悔しさに満ちていく。だから次に瞬きした途端、とうとうその目は我慢を忘れた。瞬間、涙がぼたんとこぼれ落ち、声が震えたのが自分でもわかる。それを見て、ミネルヴァが息をのんでいる。

ミネルヴァ、きよんととして、主人公の顔を見るべく『左0センチ』から『正面15センチ』の距離まで移動する。

### ●正面 15センチ

「【少し不思議そうに。

主人公の意図するところがわからないので。

『あら？ 想定した反応と違うわ。どうして……？』という気分。

内心かなり慌てているが、自分の感情が追い付かないほど急な展開で、声にも表れない」  
うん？」

〈主人公〉

「逃げないわよ。……どこにもいかないわ。」

だってあなたは、悪い魔女などではないもの」

その時そう言ったのは、ミネルヴァの発言があまりにも理解できず、また、許せなかったからだ。

何があっても訂正したくて、言葉より先にあふれるものがあつたからだ。整えてもらったばかりの頬に、顎に、一筋の雫が伝っていく。

それはそのままドレスに落ちていって、じわりとしみになって滲む。せめて指で拭きたいのに、今はそれもできない。

ああ、どうしよう。

こんなに美しいものが、自分のせいで汚れてしまった。

そう思う間にも主人公の目からは、ぽろぽろと涙が落ちていく。

● 正面 15センチ

「【主人公の言葉が予想外で、少しの間、言葉を失う。同時に、その光景に見とれている。」

少し驚いて。

まさか、そのような回答があるとは思っていなかったの。

また、主人公の涙があまりにも美しく、そんな場合ではないと思いつつも、思わず見入ってしまったので。

しかし、なぜ主人公がこのような言い方をするのか、ミネルヴァにはよくわからない。ミネルヴァは今『悪い魔女キャラクター』を演じているだけのつもりである。

なのに主人公が、ミネルヴァ自身について言及し始め、その上強い主張があるようなので――

あら……。

悪い魔女などいないとおっしゃるの？

【少し困ってしまう。】

『じゃあ、私は何の役がよかったのかしら』という意味で問いかけるが、これがミネルヴァなりの楽しいごっこ遊びである事は、主人公には当然伝わっていない。

ミネルヴァ自身それに気づいてやめたので、奇妙に言葉が途切れてしまう――

じゃあ、私は……」

〈主人公〉

「……あなたはミネルヴァでしょ？

わたしを、助けてくれた人」

主人公、ミネルヴァの意図もわからぬまま、痛くて、呼吸もできなくて、彼女の心がまるで理解できなくて。ぐずぐずになりながらも必死で訴える。  
そしてその『自分などどう思われてもかまわない』と言わんばかりの鈍感さに、頓着のなさに。とにかく、とにかく腹を立てて。

——どうして。

どうしてこの方はそんな事をおっしゃるのかしら。

どうして先程から『貴方は私の傍になんて居てはいけない』とか『悪い魔女』とか。ご自分の姿を正しく見られずに、悪し様に言うのかしら。

その度にわたしがとても悲しくて、自分を悪く言われるよりも、よほど苦しくなっている事を。どうしてこの方はわかってくだらないのかしら。

どうして。どうして……！

と、止まらない感情を、どうぶついたらいいものかと悩み果てて。

静かな部屋に、己のしゃくりあげる声だけが響きわたるのを聞いていた。

……そんな主人公を、ミネルヴァはぽかんと見つめている。

●正面 15センチ

「ぽかんと、棒読みのように主人公の言葉を復唱する。

この言葉が、あまりにも意外だったので。

また、その真意がまだよくわからないので」

私は、ミネルヴァ……」

〈主人公〉

「……そうよ。おわかりになった？

あなたはわたしにとって、それ以外の何物でもない。

あなたは悪い魔女などではないし、わたしは運悪くここにいるなんて思っていない！」

●正面 15センチ

「【素直にうなづく。

叱られた子どものように。

また、先の主人公の言葉で、彼女の意図するところがようやくわかったのだ。

つまり主人公は、ミネルヴァにとっては単なる架空の存在でしかない『悪い魔女』をミネルヴァ自身の自称だと解釈した。その結果、必死に否定してくれていると理解したので。なぜ、主人公がこうも怒るのかは、ミネルヴァにはわからない。

ただ主人公が自分を想って発言してくれている事はわかるので」  
「……うん」

強く言い切れば、ミネルヴァがやたらと素直に返事をする。

果たして主人公の想いは、このわからずやの魔女に伝わったのだろうか。

主人公とミネルヴァは柔らかな陽のさすこの部屋で見つめ合い、その光景を、蔓の姿をしたミネルヴァが、物言わず見守っている。

〈主人公〉

「おわかりいただけたのなら、二度とそんな事言わないで……！」  
「わかった……？」

●正面 15センチ

「【少し困ったように、でも嬉しそうに微笑む。

ミネルヴァとしては、この発言はちよつとしたごっこ遊びのつもりだった。

だから、それをあまりにも真剣に受け止めて、涙まで流している主人公には、正直驚いている。

なので当初はぼかんとしていたが……。

次第に主人公の言葉が胸にしみわたり、感謝と、主人公を愛おしく思う気持ちが強まってきたので」

……うん。

ふふ。確かにそうね。

【優しく。

泣いている子どもをあやす母親のように。

『貴方の言う通りね』という感じで。

ミネルヴァなりに考えた『本当の自分』の解釈を話す」

私はただの、貴方を可愛いと思っているだけの魔女だったわ。

【少し間をあけてから。

『貴方の言う通りね』という感じで。

とても優しくお礼を言う」

ありがとう。今思いついたみたい。

【※特に聞き手と主人公をドキッとさせるイメージで※

少し間をあけてから。

とても実感を込めて。

『今わかったわ。私、そんな風に想ってくれる貴方の事が、いつの間にか好きになって  
いたみたい』という意味で言っている。

だが、ミネルヴァはまだ己の『好き』という感情を自覚しきれていない。なので、こういった言い方になっている。

『好き』に代わる言葉が『可愛い』になっているので」

……貴方って、本当に可愛い」

その言葉とともに、蔓のミネルヴァが主人公の指に絡んだ。

それはそつと手を握るような、自信なさげな力だ。

主人公の気持ちをも、不安ながらに確かめようとするような力だ。

それを強く握り返した時、ミネルヴァの顔が近づく。

主人公は自然に目を閉じて、それを受け入れた。

ミネルヴァ、『正面0センチ』の距離に移動して、キスする。

### ● 正面 0センチ

「【※11回※】キスする。

優しく触れる、甘々なキスから、次第にねっとりしたデープキスに移行していく。  
主人公への愛情を込めてたっぷりキスする」

んっふ……くちゅっ ♡

ちゅっ。ちゅっ。ちゅ♡

ちゅ……♡ちゅ♡

んんっく……ちゅ♡

れえろっ……ちゅっ♡

「とても嬉しそうに微笑む。

ミネルヴァの心は、今とても温かくなっているの。

ミネルヴァには、なぜここまで主人公が涙を流すほど怒って、むきになってミネルヴァの発言を否定したのか、よくわからない。

だが、主人公がとても自分を想ってくれている事はよくわかった。

また、先程の言葉は、反芻すればするほどに、とても嬉しい言葉だと気づき始めたので」  
ふふ……。

ありがとう。嬉しいわ」

〈主人公〉

「……ん」

●正面 0センチ

「【※3回※】キスする。」

優しく触れる、甘々なキスから、次第にねっとりしたディープキスに移行していく。  
主人公への愛情を込めてたっぷりキスする」

ちゅ。ちゅ。ちゅっ♥」

泣きながら頷くと、ミネルヴァがまたキスを降らせる。

こんなに当たり前にキスする関係なのに、二人の気持ちはいまだうまくみ合わない。  
お互い憎からず思っているはずなのに、二人はこんな些細な事で行き違って、今なお次の段階に進めずにいるのだ。

それでも少しは何かが通じたと信じて、主人公は鼻をすすった。

涙でさえ大問題なのに、鼻からまで何か出たら、いよいよお化粧に申し訳ないからだ。

ミネルヴァ、『左0センチ』の距離に移動して『無声音ささやき』をする。

●左 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく  
「【とても優しくささやく。

主人公に元気になってほしいので。

今度こそ間違いなく喜んでくれるだろう事をささやく」

そうだ、聞いてくれる？

今度こそちゃんと、貴方が嬉しい事」※

〈主人公〉

「……なあに……？」

そんな主人公に、ミネルヴァが優しく切り出す。

その姿は子どもをあやす母親のようで、主人公は目の前の女性の振れ幅の広さに途方に暮れる。

それから、

……ミネルヴァったら。

さっきまでは何を言っても伝わらない赤ちゃんみたいだったのに、今はこんな顔をするなんて。……ちよっと、ずるいのではないかしら。

どうしてあなたは、瞬間瞬間でこんなにも違う姿を見せて。

子どもと大人を平気で行き来して、こんなにもわたしの心をかき乱すの。どうしていつも人の事ばかりで、ご自身の事を考えようとしなの。

あなたがあなたを思わないのなら。

わたしばかりが、あなたの事を考えてるみたいじゃない……！

と、恨めしく思う。

だが、ミネルヴァはそれすらまるで気づかず続ける。

目の前の主人公を『嬉しくする』事で、頭が占められているからだ。

● 左 0センチ 『無声音』 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「『とても優しくささやく。』

そっと、ドキドキと、最高の提案をする気分で。

ミネルヴァが今日植物の自分を持ち出してきた主な要因はこれなので。

昨日主人公の夢を覗いていた時の自分の気持ちを話す」

あのね、私。

昨夜（さくや）、思ったの。

『手が足りない』って。

【優しいが少し不満げに、口惜しそうに。

ひとつ前の言葉の意味を補足していく】

これまでは、私は二本の手と、この口。

そして、舌を使ってでしか貴方を気持ちよくできなかった。

私はそれをとっても勿体なく感じて……『もっと色々してあげたいのに』と思っていた。

そうしたら、貴方の夢がヒントをくれたの。

「少し間をあけてから。」

優しく穏やかに、でもとんでもない提案をする。

しかし、ミネルヴァにとっては最高に画期的で嬉しく、だが怖い提案でもある。

ミネルヴァはこれまでの人生で、別の姿の自分を積極的に見せる事はなかった。特に『液体の自分』に関しては非常に希少な存在なので、原則人前に出す事はないし、その真の力も隠している。

比較的無害で容姿も美しい『植物の自分』や、使い魔としては一般的な『石の自分』でさえどうしてもなかなか周囲の理解が得られず、気味悪がられたり、単なる使い魔とみなされて自分自身と同等に扱ってもらえなかったりと、悲しい思いばかりをしてきたからだ。だが、主人公なら受け入れてくれるかもしれないと思い始めている。

それは単純に『主人公は植物に犯される空想をする程度には、植物に抵抗がないらしい』と夢で見たのもあるし……。

昨日自分の治療法を受け入れてくれた主人公なら、異なる自分の姿にも理解を示してくれるのではないかと期待しているので」

……だから、貴方さえよかったら、私の。

植物の方の身体も使って貴方を嬉しくしたいと思っているの」※

〈主人公〉

「！」

だけど、主人公はどうだろう。

さっきまで『とてもセックスする気になどならない』と言わんばかりに怒っていたくせに、ちよつとミネルヴァに謝られて、甘くささやかれただけでこれだ。

頭の中は瞬時に、手指に絡むこの植物に。また、いまだ姿を見せない他の形をしたミネルヴァに抱かれる想像でいっぱいになって。

今度はまた別の意味で、息をするのも難しくなってしまったではないか。  
まったく、主人公はダメなやつだ。

もう、もっと彼女と深くつながりたくて。すぐそちらへ思考が向かってしまう。

● 左 0センチ 『無声音』 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【※特に聞き手と主人公をドキツとさせるイメージで※  
少しかすれた優しい声で。

今までにないほどのじつとりと強い熱意をもって。

そのくらいミネルヴァは心の奥底で、夢の中の植物に嫉妬しているのだ。

『昨日の私だけでは足りないとおっしゃるのなら、夢の中のあの程度のセックスでは、

ちっともご満足されなかったはずでしょう？　だから、私ともしましょう』と言いた  
い。

『吐き出す』というのは『欲求不満を解消する』という意味』

昨日一晩だけでは、吐き出すには足りなかったでしょう？

まだ」※

SE5 ミネルヴァが主人公の下腹部を撫でさする音

【最初から最後まで流す】

【最初の一撫で分を流した後、次の『ミネルヴァ』のセリフと重ねて流す

●左 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【※特に聞き手と主人公をドキッとさせるイメージで※  
少しかすれた優しい声で。

今までにないほどのじつとりと強い熱意をもって。

そのくらいミネルヴァは心の奥底で、夢の中の植物に嫉妬しているので。

『昨日の私だけでは足りないとおっしゃるのなら、夢の中のあの程度のセックスではち  
っともご満足されなかったはずでしょう？　だから、私ともしましょう』と言いたい。

『ここ』とは主人公の下腹部、つまり性器の事』

ここに残っている欲望も、私に全部ぶつけてほしいの。ね？  
どうかしら」※

〈主人公〉

「……！」

こうして主人公は、身も心も見透かすようなミネルヴァの言葉に、触れられた場所を、  
やすやすと熱くさせる。

むろん、実際は見透かされてなどいない。

ミネルヴァは独自の発想と理屈で動いていて、その時その時でより良いと思う選択をし  
ているだけ。決して、こちらの感情の機微を理解して発言しているわけではないのだ。

それをわかっていても、主人公の心は激しく揺れる。

それは、彼女の事が好きだからだ。

今、はつきりと。こんなタイミングで主人公は理解してしまった。

だから主人公はこんなにも怒ったり泣いたりするし、こんなにたやすく感情を急降下、  
急上昇させたりする。彼女の事をもっと知りたいと願い、また自分を知ってほしいと思っ  
て、必死に言葉を交わし、身体に触れようとする。

まるで——本当に、身も心もとらわれているみたいに。

だから、主人公は思う。

……そっか。

ああ。もうわたし、もうダメだわ。

今まで自分は、もっと慎重で、身持ちがかたくて。もっと警戒しながら恋愛をするタイプだろうと思っていたのに。

実際はもうダメ。

この人が好き。ミネルヴァの事が好き。

こんなの性急すぎる。どう考えたってまともじゃない。

そう思いながら、そうとわかっていながら。

それ以上に彼女の特別になりたくて。好きになってほしくて。

心でも身体でも、そうなる未来を望むようになって……。

と。

そしてこの事実を受け入れた時、主人公の内なる声が『本当に？』『彼女の事が好き？』と、改めて尋ねてきた気がした。

〈主人公〉

「……うん」

その声に答えるのと同時に、主人公はミネルヴァの提案に頷いた。

ミネルヴァ、『正面0センチ』の距離に移動して、キスする。

●正面 0センチ

「※1回※ キスする。

触れるだけの優しいキス」

ちゅ♡

「そつと。とても嬉しそうに。

主人公が頷いてくれて、ものすごく安心しているので。

安心した気持ちで、朝から秘めていた自分の気持ちを打ち明ける」

ありがとう。受け入れてくれて嬉しいわ。

人間の私も、植物の私も。

朝からずっと、貴方をもっと喜ばせたくて仕方なかったの。

「※1回※ キスする。

触れるだけだが、とても心のこもったキス」  
ちゅ♡「

ミネルヴァ、『左0センチ』の距離に移動して話す。

●左 0センチ

「【※3回※】呼吸する。

ゆっくり、深く深呼吸する。

吸っている空気が喜びそのもので、それを堪能しているような呼吸」

ふうう……。はあっ……。♡

ふー……。う。

「とても優しく。

少し興奮を収めて、優しく話そうとする。

でも、内心ではワクワクドキドキしている。

『これから主人公さんを一杯気持ちよくして、あの悪い植物さんに必ず勝てる』という  
余裕と自信に満ちた様子で」

じゃあ、手が増えたお祝いと、先程の非礼のお詫びに。

こちらのお耳を指でいじってあげながら、植物の方の私で、沢山触ってあげるわね」

〈主人公〉

「……！」

するとこれまで手首より上だけに絡んでいた植物が、ゆっくりと這うように降りてくる。それから主人公を背後から抱きしめ、その時ぎゅっと力がかかる。そして、包むように身体に触れ始めたが……主人公は少しも怖くなかった。それどころか、ただときどきして。

——ああ、なんだ。

わたし、植物のミネルヴァに会ってからずっと。ずっとこうされかったんだわ。本当はもっと強く抱きしめてほしいと、ずっと待ち望んでいたんだわ……。

と、ようやく気付いて……そっと目を閉じた。

**SE 6** 蔓が下りてきて、主人公の身体に絡む音

【最初から最後まで流す】

【次の『ミネルヴァ』のセリフと重ねて流す】

【SE7と重ねて流す】

SE7 ミネルヴァが、主人公の右耳に指を入れて、不規則に動かす音

【耳の穴を軽くほじる、耳の中をふさぐような音を入れる】

【※不規則なタイミングで、何度も行う】

【▲1でストップする】

● 左 0センチ

「【※セリフ終わりまで※ 耳舐めする。

耳のふちを軽くはむはむする】

んんっふ……はむ……ちっ♡

【吐息交じりに、耳の穴に舌を入れて舐める。

指も、舌も、植物の手も、いずれも手を抜かず、主人公を気持ちよくするという熱意を

込めて】

はあ、はあ……ちゅるっ♡

ちゅっ♡ ちゅばっ♡

ふー……♡

ちゅ。ちゅ。ちゅるうっ♡

はあっ……♡」

ミネルヴァ、『左0センチ』の距離に移動して『無声音ささやき』をする。

●左 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「うつとりと嬉しそうに。」

主人公の反応を喜びながら。

植物の自分の器用さは、かなり自信があるので」

器用でしょう、植物の私。

細かい作業なら、人間の私より上手にできるの」※

SE8 ミネルヴァが、主人公の服を脱がせる音

【最初から最後まで流す】

【次の『ミネルヴァ』のセリフと重ねて流す】

〈主人公〉

「あっ……♡」

植物の手が、蔓の先を優しくドレスに絡める。

しつかりと一番上まで閉じたボタンを一つ一つ丁寧に外して、少しずつ肌を露出させていく。

同時に薄紫の花が髪を一房つまみ、キスするように触れた。

すると、またあのいい香りがして……主人公は羞恥心に指先まで染められながらも、その身を任せた。

●左 0センチ 『無声音』 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「うつとりと嬉しそうに。」

主人公の反応を喜びながら。

植物の自分の器用さは、かなり自信があるので」

こんな風にお洋服も、簡単に脱がせてしまえるわ。

【※軽く耳を吹く※

優しく、とても余裕がある感じで。

植物の手を許可された事で、ミネルヴァは今、確実に主人公を気持ちよくできるという自信に満ちているので」

ふっ♡

【※しばらく※ 耳舐めする。

耳の穴を、入り口付近から下を伸ばせる一番奥まで、丁寧にくぼくぼ舐める」

れえんろ……ちゅ♡

くぼくぼっ……くぼっ♡

ちろちろ、ちろちろ、ちろちろ……♡

ちゅっ。ちゅっ。ちゅっ♡

くぼくぼ……くぼくぼ……くぼくぼ。

【※1回※ キスする。

触れるだけの優しいキス】

ちゅ♡※

主人公を植物の手で抱きしめながら、ゆっくりとドレスを脱がしながら。そして服ごしに伝わる身体の形を、愛おしげになぞりながら。

ミネルヴァが人間の手で主人公の耳を弄くり、耳元でささやく。

SE9 ミネルヴァが、主人公の服を脱がせる音2

【最初から最後まで流す】

【次の『ミネルヴァ』のセリフと重ねて流す】

【SE8が終わっていない場合は、そちらとも重ねて流す】

● 左 0センチ 『無声音』 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「うつとりと嬉しそうに。」

主人公の反応を喜びながら。

植物の自分の器用さは、かなり自信があるので」

ほら……見て。

貴方にあげたこのドレスは、とても品があつて、貞淑に見えて。

少し近寄りがたいような雰囲気があるけど」※

SE10 ミネルヴァが、主人公の服を脱がせる音3

【最初から最後まで流す】

【次の『ミネルヴァ』のセリフと重ねて流す】

【SE8が終わっていない場合は、そちらとも重ねて流す】

● 左 0センチ 『無声音』 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「うつとりと嬉しそうに。」

主人公の反応を喜びながら。

植物の自分の器用さは、かなり自信があるので」

……こうすると、簡単にお胸が露出してしまうのよ」※

〈主人公〉

「あっ……」

それは嬉しそうで得意げで、自慢の技術を披露する少女のようだ。

その新しい手に自由にされるうち、主人公は、またも彼女に裸の胸を晒してしまった。それは乳房だけが出るように脱がされたせいで、とても窮屈だ。

胸は左右から圧迫されるせいで不自然に膨らんでおり、実際よりも大きく見えてしまっている。これでは、悪戯されるのを待ちわびているようではないか。

こんな姿にされた恥ずかしさに、主人公は言葉を失い、それからこう思う。

……まったくミネルヴァときたら。

無垢すぎて、無邪気すぎて、本当に参ってしまうわ……。

せっかく人が、こんなにいやらしい格好にされながら耐えているというのに。

完全にわたしの身体よりも、この状況そのものを楽しんでいるじゃないの。

と。

でも、主人公は、ミネルヴァのそんなところも好きだ。

主人公よりも年上で、目上どころか天井人みたいな存在のはずなのに、ちっともそれらしくなくて。

なのに時々、わけがわからないくらい深く、優しく包み込んでくれる。

散々こちらを深読みさせるような事をするのに、実際の行動原理はとことん単純で。

いつもただ、主人公が喜ぶだろう事をしてくれている。

だから主人公はふてくされた視線を送りながらも、素直に身をゆだねた。

今彼女についてわかる事も、わからない事も含めて。

わからないまま、彼女のすべてを受け入れたいと思ったからだ。

●左 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「『素直に感心しつつ、驚いている。』

ミネルヴァ自身、少し驚いている感じで。

そのくらい、このドレスの構造はセクシーだと思って。

ミネルヴァは、昨日まではそんな事考えもしなかった。

昨日まではこのドレスの事を、ただ気品があって、少し影のある女性に似合うだろう服、くらいにしか思っていなかったからだ。

なのに今は、このドレスがとても性的に見える。

ミネルヴァには、その理由がわからない。

『それは今まで、この服をじっくり見た事がなかったからかしら』と解釈している。

『主人公が着た事で、新しい視点を持ったから』だとは気づいていない」  
すごいわよね。

きつと、お乳をいじめてもらう為に、こんな作りをしているのでしょよね。

【※しばらく※ 耳舐めする。

耳の穴を、入り口付近から下を伸ばせる一番奥まで、丁寧にくぼくぼ舐める。

うっとりとして舐める一方で『舌の長さが足りない。もっと奥まで入って、彼女を気持ちよくしたいのに、限界があるのが悔しいわ』と思っている。

だが植物の自分で触れるのは、さすがに主人公にとっては恐ろしいだろう。あまりよくないだろうと思い、避けている」

んれる……ちゅぱっ♡

ぺろぺろ、ぺろぺろ、くぼっ♡

【※4回※ 呼吸する。

興奮気味の、うっとりした呼吸】

すーっ……はあ。

すーっ……はあ♡※

SE11 植物の手が、主人公の肌に触れる音

【最初から最後まで流す】

●左 0センチ 『無声音』 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「かすれたやや低めな声で。

嬉しそうに。

主人公の勃起した乳首を、植物の手が触れ始めたので。

ミネルヴァはそれが硬い事にホツとしている。

例のごとく『いやらしい言葉で主人公をあおっている』気持ちよりも『よかった、私のやり方で、主人公さんがこんなに喜んでくださっている』という無邪気な喜びで言っている」

ああ。硬あい……♡

貴方の可愛い乳首さん。

葉っぱの先が触れる度に、すごく喜んでする。

余程こうなってしまったのが嬉しいのね」※

〈主人公〉

「んっ……♡」

柔らかで心地いい葉と蔓が、主人公の、昨日ひたすらに愛された場所に触れる。

主人公はきゅっと目を閉じ、その刺激に小さく息を漏らしたり、こらえるようにゆつくりと息を吐いたり。その度にうっとり、乳房の先からじんわり滲みだす快感を味わう。

この時間はいつも、あまりにも甘く切ない。

もっといきなり強く、最初から乱暴にしてくれたっていいのに。ミネルヴァはいつも、絶対に優しくするからだ。

だけど、その触れ方こそが彼女で――……自分はミネルヴァのそういうところを好きになつたのだと実感もする。

結局、主人公の思考は夢とは矛盾している。

ミネルヴァは随分とあれに対抗したがっているようだが、あれはあくまで空想だ。

性経験がなかった頃に抱いた、快感も苦痛もぼんやりとしかイメージできず、なんの参考もないままに描いた架空の世界なのだ。

つまりそれは、今の、実際の嗜好とはかけ離れている。

本当は恋した人にいつも優しくされて、いつも安心していたい。

いつでも愛を感じて甘えながら、どろどろになるまでとろけていたい。

こちらこそが、主人公が真に望んでいたセックスなのだ。

だけどそれも、昨日までは知らなかった。

昨日初めて、ミネルヴァに教えられたのだ。

● 左 0センチ

「穏やかに、嬉しそうに。

主人公がかわいらしい反応を見せてくれているのが嬉しいので。

また、植物の手が自在に使えて嬉しいので」

ふふ。

少しくすぐったい？ では、撫でる力をわずかに強めましょうか。

ほら……こうやって」

SE 12 植物の手が、主人公の肌に触れる音2

「最初から最後まで流す」

「次の『ミネルヴァ』のセリフと重ねて流す」

● 左 0センチ

「穏やかに、嬉しそうに。

主人公がかわいらしい反応を見せてくれているのが嬉しいので。

また、植物の手が自在に使えて嬉しいので」

蔓が乳首さんを。

円を描くように一周する形で巻きついて。

締め付けたり……緩めたりして気持ちよくしてあげる」

〈主人公〉

「あっ……♡ あ♡ あーっ……♡」

だけど、植物の手を得たミネルヴァは、昨日よりも、もっと積極的らしい。

ミネルヴァは主人公の反応をしばらく眺めた結果『もっとよくできそうだ』と判断したらしい。

たちどころに力加減を変えると、昨日よりもさらに正確で、適切すぎる強さで刺激してくる。

同時に、下から持ち上げるように乳房全体も揉み始め……主人公は昨日よりも速いペースで、昨日全部知られた、一番好きな強さで愛撫され始めた。

● 左 0センチ

「【特に優しく。

何の他意もなく、心からの感想と、昨日の主人公の反応について述べている。

だが、例によって、それが余計に主人公をおおっているように聞こえる。

『ここ』とは乳首の事』

貴方の乳首さん、昨日は一杯頑張ったものね……♡

こねこねする度にびくびくして。

摘（つま）まれると、嬉しそうに硬くなって♡

私、貴方のここが大好きになってしまったの。

【少し間をあけてから。

つい数時間前までの事を、思い出して話している感じで】

一日中でも、愛してあげたい位。

今日も沢山可愛い声が出せるように、沢山刺激してあげるわね。

もう二度と淋しくさせないわ。

【※4回※ 耳にキスをする。

主人公の興奮をおおる、ダメ押しのようなキス』

れる……ちゅ。ちゅ。ちゅっ♡」

〈主人公〉

「あっ♡ あっ♡ あっ……♡

ああ……っ♡ あっ♡ あっ♡ ああ……♡」

容赦なく気持ちよくされ、びくびくと、とめどなく喘ぐ主人公の耳元で、ミネルヴァがくすくすと笑う。

それだけで瞼は熱くとろけ、吐く息は荒く、茹るようだ。

次第に快感で視界はにじみ、それを見て、ミネルヴァはますます嬉しそうにする。

● 左 0センチ

「【※3回※】呼吸する。

興奮気味の、少し早い呼吸」

はーっ、はーっ、はーっ………♡

【※息遣いのみ※】で表現する。

セクシーに息をつく」

……ん。

「うっとり嬉しそうに。

植物の手から、主人公の硬く勃起した乳首の感触が得られたので」

ああ………♡

こんなに硬くして。なんて可愛いの……。

くるくるに巻き付けて。

きゅーっ、きゅーっ、きゅーっ……って、締め付けてあげるわね。

「とても愛おしそうに。」

植物の手の器用で優しい指先で、主人公の乳首を最大限気持ちよくなれるように刺激する」

きゅーっ、きゅーっ。

ぎゅーっ……♡

こねこね、こねこね。こねこね♡」

今のミネルヴァは、植物の手で触れる事を許され『ようやく本領を発揮できる』といった面持ちだ。

幸福そうに主人公の弱いところを執拗に擦り、適切な強さでこね、ひねり、弄くりまわして。その繊細な指先は、主人公をさらにさえずらせる。

……だけど、彼女がこんな風になるのはきつと、本当はセックスに限った事ではないように思う。

彼女はきつと今までも『植物の手が使えれば、もっと』と思った事があって。

その度に、使えば気味悪がられたり。使わなければ後悔したり、己を叱責したりする事があったのではないか。

先ほどの口ぶりから、主人公はそう推察する。

仮に。仮にもしそうなら、今は本当に楽しいに違いない。自分らしい姿のまま、自由に、好きなだけ好きなようにふるまえるのだから。

それを思うと、主人公はいくらでも好きなようにさせてあげたくなっただけ……。

『自分が心のままに行動した時、相手はどう反応するのか』という一例に。つまり彼女の実験台になってやろうと思った。

その実験結果は、たとえどんなに小さくとも、彼女の心に灯りをともせる気がする。

『自分の人生にはこんな出来事もあったのだ』という力に、かすかでもなれると思う。

そう考えるとともに、欲望の火はじわりと熱くたぎる。主人公の心はもう、『このまま本気の彼女にめちやくちやにされたい』というよこしまな期待で満ち満ちていた。

## ● 左 0センチ

「嬉しそうに、もうこらえきれない、という感じで申し出る。

自分の口でも、もっと主人公を感じたくなったので」

ふふ。……何だか、お口でもしてあげたくなってきちゃった。  
させて下さる？」

## ▲ 1 ここでSEE6がストップする。

〈主人公〉

「っ……そんな事……」

ミネルヴァ 『正面30センチ』から『正面 下30センチ』に移動する。

●正面 下 30センチ

「【※乳首を吸う※

上品に、でも思いのまま、吸いたいように吸っている感じで。

人の身体と言うよりは、甘くて美味しいものを丁寧に、大切にしゃぶっているような感じで。

また、吸いながら話す」

はあっ……あんむ……ぺろっ♥」

『聞かなくてもいいのよ』と言う前に、その唇が寄せられた。

思えばこれまで、ミネルヴァはいつでも……いや、おおむね返事を待っていていたように思う。

それなのに今は、まるでもう我慢しきれないみたいに口を開けて……当然のように吸い付いてくる。

それを主人公は、自分に欲情してくれている証拠だと思い、嬉しくなった。

ここにいるのが自分だから、ミネルヴァはこんな反応をしてくれるのだと願い、そう信じてされるがままとなる。

●正面 下 30センチ

「【※乳首を吸う※

上品に、でも思いのまま、吸いたいように吸っている感じで。

人の身体と言うよりは、甘くて美味しいものを丁寧に、大切にしゃぶっているような感じで。

また、吸いながら話す」

れーろっ……ちゅば♡

れるれる、れるれる、れるれる……。

ふちゅっ♡

んう……美味し……♡

「ふと思い出したように。

『そうだ、これを聞いておきたかったの』と思い出した感じで。

ミネルヴァは本気で『主人公さんは、何か特別なものを食べているに違いないわ。だからこんなにもいいにおいがしたり、汗や愛液が果実みたいに美味しかったりするのよ』と

思っているの。

また、吸いながら話す」

貴方って、何か特別な物を食べてらっしゃるの？

じゅる……っ ♡

【※2回鼻呼吸※ する。

うっとうと大きく、主人公のにおいをかぐ】

すーうっ……。はーっ……。 ♡

【うっとうと嬉しそうに。

舐めながら話す】

全身ほんのりいい匂いがして……。じゅるっ ♡

どこを舐めても気持ちいい。

いつまでもこうしていられそう。

【※乳首を吸う※

上品に、でも思いのまま、吸いたいように吸っている感じで。

人の身体と言うよりは、甘くて美味しいものを丁寧に、大切にしゃぶっているような感じで。

また、吸いながら話す】

はんむ……。ちゅるっ ♡

ちゅるるる……ちゅぶっ♡

ぺろぺろ、ぺろぺろ。ぺろぺろ。

れるれる、れるれる。れるっ♡

【※息遣いのみ※】で表現する。

うっとり、荒く息をつく」

ふーっ……♡」

〈主人公〉

「はあっ……♡ あっ。あっ……♡ ああっ……♡」

昨日よりもさらに弱く、さらに感じやすくさせられた乳首を、ミネルヴァの口と手が、ねっちりと愛撫する。

主人公はもはや質問に答える事さえ難しくなり、何か支えてくれるものが欲しくなあって、蔓の手に、しっかりと十本の指を絡めた。

今にも快感の波にのまれ、深く落ちていきそうなところを。植物の手をぎゅっと握った、握り返されたりする事でもちこたえて。

少しでも長くこの時間が続くようにと、ミネルヴァの奉仕を受け入れた。

……それにしてもまったく、奇妙な質問をするものだ。

全身がいい匂いになって、体液まで格別になるような食べ物。

そんな都合のいいものがあるものと主人公は思うし、もしあったところで、自分が手に入れられるようなものではなからうと思う。

だが、これまでのやり取りから察するに、どうやらミネルヴァの性知識は主人公未満らしい。だから、仕方ないと言えば仕方ないのだが。

……だから主人公は、本当は伝えたい。

——それは。あなたがそんな風に想ってくれるのは、きっと。

あなたも。あなたもわたしの事を好きだと思ってくれているからではないの？

あなたもわたしの事を特別に思ってくれているから、そう感じるのではないの？

と。

だけど、主人公にはできなかった。

勇気を出してそう問いかけてみて、もしあっさりと否定されたら。

芽生えたばかりの恋心が散ってしまいそうで、怖くて……。

彼女と向き合う事から逃げたのだ。

【最初から最後まで流す】

【次の『ミネルヴァ』のセリフと重ねて流す】

● 正面 下 30センチ

「うっとり嬉しそうに。

主人公が沢山感じてくれている事、あの夢の中の植物に勝てそうな事がとても嬉しいので」

可愛い。身をよじって……気持ちいいのね。

身体を動かせない事に興奮していらっしゃるの？

【※乳首を吸う※

軽く吸う】

ちゅ。

【とても優しく。

煽る意味はまるでなく『そう考えるのも当然の事よね。嗜好に沿った事が起きているのですから』という感じで】

いいのよ？ そういう嗜好をお持ちですものね。

【※乳首にキスする※

露骨に音を立てて吸う】

ちゅばっ♡

少し位揺らしてしまっても平気。

【『植物の自分が支えるから』という意味で言っている】

ちゃんと支えているから。

【※乳首にキスする※

露骨に音を立てて吸う】

はあふ……っ。

ちゅばっ♡

ちゅるるるっ……れろおっ♡

【少し間をあけてから。

うっとりと幸せそうに。

主人公の乳首を、目と舌でしっかり堪能して言っている感じで。

『もっと主人公さんを喜ばせたい』という気持ちは変わらないが、それ以上にこのセツクスそのものに夢中になっている】

ふふ。乳首さん、硬くなって可愛い。

舌で押すと、はね返してくる……♡

……ぐりぐりしてあげなくちゃ。

【※しばらく乳首を吸う※



『今朝、自分が用意したばかりの新しい下着が、またもきつとぐしょぐしょに濡れて。さらなる行為を待ちかねているだろう』という事ばかりを気にして。

そのもつと内側にある気持ちに、気づこうともしていない。

ミネルヴァ、『左0センチ』の距離のまま『無声音ささやき』をする。

●左 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「『そつと優しくささやく。』

とても優しいが、有無を言わせない感じで」

脱ぎましょうか」※

〈主人公〉

「……………」

だから、早く触れて欲しい気持ちと、この想いに気づいてほしい気持ちで焦っていたら、ミネルヴァがそう言った。

相変わらず一つの事に集中したら、そちらへかかりきりになる人だ。きつとさっきの質問の件など、とうに忘れてしまったに違いない。

でもそれは、ただただ主人公を気持ちよくしようとしてくれているからだ。

ただ目の前の主人公の事だけを考えて、夢中になってくれているからだ。

彼女の行動はいつも少しずれているが、いつでも確かにこちらを想っている。

……今はそれで、十分すぎる程に嬉しい。

● 左 0センチ 『無声音』 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「優しく、ゆっくりと。」

声はとても優しいが、無意識のうちに、ものすごく嫉妬しながら話す。

夢で見た光景を、夢で主人公がされていた光景をそのまま述べる」

でも……貴方は。

全部じゃなくて、半分位は着たまま。

お胸は出ているのに、ドレスはそのまま」※

〈主人公〉

「……あっ……!」

しかしミネルヴァはここで、またも予想外の行動をとる。

ドレスの中に植物の手を入れられ、そのままつきり裸にされるのだろうと思っていた

ら……細く優しい蔓は、主人公の下着だけをおろしていく。

SE14 蔓が主人公の下着をおろす音

【最初から最後まで流す】

【次の『ミネルヴァ』のセリフと重ねて流す】

●左 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【少し嫉妬と淋しさが入り混じって。

それでも優しく、ゆっくりと。

声はとても優しいが、無意識のうちに、ものすごく嫉妬しながら話す。

夢で見た光景を、夢で主人公がされていた光景をそのまま述べる】

でも……シヨーツはこんな風に下ろされて……お靴の所に、片足だけ引っかかる。

そういうのが好きでしょう？

知ってるわ。貴方の夢は、最後まで見ていたから」※

〈主人公〉

「……………っ♡」

その時、ゆっくりと丁寧におろされたショーツが、その言葉通りに丸まったまま右足だけに引っかけた、そこで止まった。

色が変わるほど愛液で濡れたそれは、主人公の欲をそのまま表している。

それはあまりにもいやらしくて、もう、見るだけにおい立つようで。主人公は思わず目を閉じてしまいたくなる。

……でもミネルヴァには、これを見て欲しい気もした。

だって『こうなる』理由は、昨日とは明確に違う。

禁欲が続いて、我慢しきれなくなっただけで濡れてしまったのとは、何もかもが違う。

主人公の奥が濡れてしまう事。

それは『わたしはあなたを求めて、あなたが欲しくて、こうなってしまったの』という、何よりの証だ。

こんなありさまを見られるのは何度繰り返しても恥ずかしいし、きっと一生慣れないと思う。

けれど……ミネルヴァにはしっかり見て、気づいて。その目に刻み付けてほしかった。

## ● 左 0センチ

「「ちよつとすねた感じで。」

淡々と普段通りのつもりで。」

だがその内容はミネルヴァ以外の人間が聞けば、全員『これは嫉妬しているようだ』と明らかなものである。

しかし、それでもミネルヴァだけが気づいていない。

そのうえミネルヴァは『夢の中での出来事は、主人公にはコントロール不能である』とわかっていて、なお言っている。

こみ上げるこの気持ちは何なのか、ミネルヴァだけがわかっていない」  
でもね、私、納得していないの。

どうして私がいるのに、夢まで連れて来て下さらなかったの？

私なら、あの夢にいた悪い生き物よりもずっと。

貴方を気持ちよくできるのに……。

酷いわ。

【困ったように。

『今感じている自分の感情の名前が、本当にわからない。貴方は知ってる？』という感じで」

ねえ……。こういう気持ち……。何（なん）て言うのかしら。

貴方は知ってる？」

〈主人公〉

「……………」

きっと、それは。

その時、誰かが『今こそが彼女の気持ち確かめる時だ』と。『彼女がその感情の名を知らないのなら、知ってもらえるよう、自分から促す時だ』と言っているような気がした。

● 左 0センチ

「【※息づかいのみ※】で表現する。

ふと気づいたように。

主人公が答える前に、自分で前に答えを見つけたので」

……。

【途端に納得した様子で。名前のわからない感情の正体に気づいたつもりでいるので】

ああ……………そうか。

わかったわ」

〈主人公〉

「……………えっ？」

だが、主人公が今度こそ答えようと口を開きかけた時、ミネルヴァは先に答えを見つけ  
てしまう。

瞬間、なんだか一人ですっきりした様子で微笑んで。

秘密を打ち明けるみたいに耳打ちしてくる。

ミネルヴァ、『左0センチ』の距離のまま『無声音ささやき』をする。

●左 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【秘密を打ち明けるように、嬉しそうに。

しばらく続いたもやもやに、自分で答えを見つけて、すっきりした様子で。

だがミネルヴァは『張り合いたいと思う気持ち』こそが『嫉妬』であるとかわかってい  
ない。

『あの生き物』とは『夢の中の植物』の事」

私、張り合いたいと思っているみたい。

あの生き物と。

【特にひそひそと嬉しそうに。

とっておきの秘密を打ち明けるように。

ミネルヴァはこれを『いやらしく、相手を煽る言葉』以上に『自分の心からの素直な気持ち』『主人公さんも自分も一緒に幸せになれる、とても素晴らしい事』として認識しているので」

ふふ。

私ね。貴方が私のもたらす刺激で、可愛い声をあげたり。悶えたり。よがり、絶頂してくれる姿を見るのが大好きみたいなの」※

〈主人公〉

「……っ♡」

ミネルヴァ、『左0センチ』から『正面30センチ』に移動して、主人公を正面から見つめる形で言う。

●正面 30センチ

「優しく。」

さらりと、それが当たり前のように言う。

まるで『私という恋人がいるのだから、他の方と親密になりすぎないでね』と言っているような、自分の中の常識を述べる感じで」

他の誰にも、これはさせたくないの。

お忘れにならないでね。

【少し間をあけてから。

少し考えながら話す感じで。

性器への愛撫を、今回はどのような体勢でしてあげるのがいいのか、少し悩んだので  
では……足を……。

【穏やかに優しく。

この提案が、主人公にとってはものすごく恥ずかしいものであるという事は、まるでわかっていないので】

そうね。私の肩にかけるようにしましうか」

〈主人公〉

「！」

ミネルヴァがまたも答えを待たずに、次なる展開に歩を進める。

主人公を、植物の手も使いながらたやすく持ち上げ。自分の肩に主人公の両足がかかるようにして、その間に入る。

SE15 蔓が主人公の足を持ち上げる音

【最初から最後まで流す】

【0—3秒ほど流した後、SE16と重ねて流す】

SE16 ミネルヴァが、主人公のスカートの中に頭を入れる音

【最初から最後まで流す】

そして、ドレスのスカートの中に自らの頭を入れる形で……下着を奪われた主人公のお尻を引き寄せ、顔に性器を密着させた。

▲ ボイス加工あり

【少しくぐもって聞こえる】

【あまり分厚くない生地 of スカートの中に顔を入れて話しているように聞こえる】

● 正面 下 50センチ

「【※息づかいのみ※】で表現する。

うっとり息をつく。

主人公 of スカートの中に頭を入れて話している。

興奮しつつも、ホッと一息つく感じで。

主人公が不安定な姿勢になる事なく、自然と愛撫ができる体勢に落ち着けたので」  
ふう……。

「くすくすと嬉しそうに。

主人公の太ももを自分の頬で感じるのは、何だか心地よく、興奮するので。

しかしミネルヴァは自分が『主人公の太ももが特に好きな太ももフェチ』である自覚がない」

ふふ、貴方の足に顔が挟まれてしまったわ」

〈主人公〉

「ミ、ミネルヴァっ……♡」

まさか、こんな事までされるなんて。

主人公、あまりにもあんまりな格好にさせられて戸惑うが、身体を支える二種類の手は強く、少し動いたところでびくともしない。

それはいい。この際それはもういいのだが、やはりこの体勢は大問題だ。股間が唇に密着しすぎるし……スカートに覆われているせいで、今ミネルヴァがどんな顔をしているのか、見えない。

▲ ボイス加工あり

【少しくぐもって聞こえる】

【あまり分厚くない生地のスカーツの中に顔を入れて話しているように聞こえる】

● 正面 下 50センチ

「【全く意に介さずに。

なんだか嬉しそうに。

主人公の太ももとお尻の感触に夢中になっているので】

気持ちいい……。

これ……何だか嬉しいかも。

【※太ももを舐めてキスする※

戯れるように舐めて、キスする】

あんむ……ちゅ ♡

【くすくすと嬉しそうに。

主人公の太ももを自分の頬で感じるのは、何だか楽しいので。

ミネルヴァは自分が『主人公の太ももが特に好きな太ももフェチ』である自覚がない】  
一杯舐められるもの。

【少し間をあけてから。

素直に感心した様子で。

主人公の太ももについて述べる。

その位、主人公の太ももは素晴らしいので。

ミネルヴァは自分が『主人公の太ももが特に好きな太ももフェチ』である自覚がない」  
貴方の太腿って柔らかいのね。

すべすべで……さらさらで。ぶにととしていて。

軽く舌で押しただけで、指先に吸い付くよう。

【※太ももを軽く噛んで、キスマークを付ける※  
じやれるようにキスマークを付ける】

んっふ……。

はむっ……ちゅ♡

【※主人公の性器を舐め始める※

乳首の時よりも熱心に、より力が入っている感じで。

人の身体と言うよりは、甘くて美味しいものを丁寧に、大切に舐めているような感じで」  
んんく……ちゅるっ♡　じゅるっ♡　じゅるっ。　じゅるるるっ♡

【※5回※ 呼吸する。

うっとりとした、少し荒い呼吸】

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあっ♡」

SE17 ミネルヴァが、主人公のスカートをめくる音

【最初から最後まで流す】

だがここで、ミネルヴァはスカートをめくり、こちらに顔をのぞかせる。  
それから主人公を見上げて微笑み、欲望で潤った瞳で、こんな事を言い出した。

●正面 下 50センチ

「【じつとりと興奮し始めて。

これまでも十分興奮してはいたが、やはりミネルヴァは『胸』『足』『性器がらみ』のプレイが好きなので。

だがやはり自覚はなく『主人公さんの快感が高まってきたから、私もとても嬉しくなっているみたい』という認識である」

いけないわよね……♡

私ね。昨日からずっと。

感じてる貴方を見ると、つい我慢出来なくなってしまうて。  
気づいたらいつもこうしてしまうの。

【※4回※ 主人公の性器を舐める。  
比較的控えめに。

戯れるように音を立てて舐める。

人の身体と言うよりは、甘くて美味しいものを丁寧に、大切に舐めているような感じで  
れえろ……れえろ……べえろ……ちゅ♡

【※1回※ 呼吸する。

うっとりとした、長い呼吸】

はあ……♡

【※6回※ 主人公の性器を舐める。

先程よりしっかりと、大きな音を立てて舐める】

んっふ。じゅるっ♡

じゅるるるっ。じゅるっ。じゅるっ。じゅるっ♡

【※4回※ 呼吸する。

うっとりとした、少し荒い呼吸】

はーっ、はーっ、はーっ……♡

【※1回※ 太ももにキスする。

ちゅぽっとした、軽く触れるだけのキス】

ちゅ♡  
「

〈主人公〉

「あっ……♡ あっ……♡ ああっ……♡」

こうなればもう、ミネルヴァはどこまでも無遠慮だ。

普段は自分の正直すぎる言動や、あまりにも飾らない態度を改めたがっているくせに。セックスにおいては、まるでそうする気がないのだ。

つまり、主人公は犯される。

彼女の気が済むまで、とことん快樂の渦に沈められる事が、今はっきりと決まった。

●正面 下 50センチ

「うっとり嬉しそうに。

主人公が自分の愛撫でたっぷり感じて、喘いでくれるのが嬉しいので」  
はあ……その声よ。

その声を聞くと、私、たまらなくなってしまうの。

【※しばらく※ 主人公の性器を舐める。

丁寧に控えめな音から、だんだん激しくなっていく。

夢中で。また、人の身体と言うよりは、甘くて美味しいものを丁寧に、大切に舐めてい

るような感じで」

れる、れる。ぴちや、ぴちや ♡

れるれるれる、ずるっ ♡ じゅるるるるっ、じゅるっ ♡

【※舐めながら話すせいで、聞き取りにくくなる※

『どうしたらもっと、あなたのその声が聞けるのかって』と言っている」  
どうしたらふおつと……あなひやのその声がひへふのかひらっへ。

【※舐めながら話すせいで、聞き取りにくくなる※

『その事で、頭が一杯になってしまふの』と言っている」  
その事へ……頭がひっふあいにひやってひまうの。

【※3回※ 主人公の性を舐める。

夢中で。また、人の身体と言うよりは、甘くて美味しいものを丁寧に、大切に生手いる  
ような感じで」

んっふ……んっく……じゅるっ ♡

【※舐めながら話すせいで、聞き取りにくくなる※

『大丈夫よ』と言っている」

らいひようふよ。

【※1回※ 股間にキスする。

軽く音を立てるだけのキス」

ちゅ。

「とても優しく。」

ここからは特に伝えたい事なので、舐めるのをやめて話す。

夢の中での光景を述べている。

主人公が夢の中の植物にされて喜んでいた事をそのまま話す。

淡々と見たままを表現しているが、実際はとても嫉妬していて『あのようなお粗末なセックスの、何がよいのかわからないわ』『主人公さんをあのように扱うあの植物が、たとえ存在しないものだとかわかってはいても、私はとても憎らしいわ』と思っている」

我慢しないでいいわ……♡

貴方はこんな風に。

お尻を掴まれて、身体を固定されて。

無理矢理舐められるのが好きだものね。

身勝手に一方的に貪られて、中を思いつきりいじられると、沢山感じてしまうのだものね。

「とても優しく。」

言い聞かせるように。

いつも通りの口調で、だがはつきりと言いつ切る。

ミネルヴァは、そのくらい夢の中の植物に嫉妬しているので。

また、先程『悪い魔女』発言に憤った主人公のような気分になっている。

先ほど主人公が『ミネルヴァは悪い魔女ではない』と言ってくれたのと同じように、自分もまた『主人公さんは大切にされるべき人よ』と強く伝えたいと思っている。

しかしミネルヴァは、主人公がどのような気持ちであの発言をしたのかを、完全に理解しているわけではない。

ただ自分がされて嬉しかった事を、同じように返そうとしているだけである」  
でもね？

あんなセックスはいけないわ。

貴方は大切にされるべき人なの。

もう、夢でも……私との事を思い出すようにして頂戴ね。

わかった？」

〈主人公〉

「わかったっ………」

だから主人公は、一も二もなく頷いた。

ミネルヴァの温かく心地いい舌でたっぷりと、いやらしい音を立てられながら舐められて。全身が痺れるほどの快感に何度も何度も、おかしくなるほどに強く揺さぶられて。

また涙を浮かべながら、必死に服従の意志を見せた。

●正面 下 50センチ

「【優しく聞き返す。単純に、よく聞こえなかったのですね?】」

〈主人公〉

「わかったからあ……♡

他の誰かの事なんて二度と考えない。

あなたの事だけ。あなたの事だけ、考えるからあつ……♡」

『だから、わたしの事を好きになってください』

『こんな事、出会って一日も経たずに言うなんておかしいのはわかっているけれど』

『一か月だけの助手じゃなくて、あなたの恋人にしてください』

『一か月が過ぎてもあなたのそばにいていいという、権利をください』

もしそれが言えたのなら、どれだけよかっただろう。

昨日までの主人公は、あれだけ気が強くて。目上にだって齒向かって、怖いものなんて

何一つないみたいない演技をして生きてきたのに。

恋を知った今は、あまりにも怖いものが多すぎた。

たとえば自分の些細な一言で、このひとときが壊れてしまう事さえ、今は耐えがたく恐ろしかったのだ。

●正面 下 50センチ

「【※息遣いのみ※】で表現する。

うつとりと満足そうに。

主人公から、望みの答えを得られたので』

……。

「とても嬉しそうに。

ゆっくと。

『それでこそ最善の判断だ』と言うように」

うん……♡

そうよ。ご理解頂けて嬉しいわ。

あの夢よりも気持ちよくして差し上げる。

「少し間をあけてから。

少し考えて話す感じで。

今は片手で主人公のスカートをめくりながら愛撫していたが、これでは集中しきれないので」

……でも、スカートが少し邪魔ね……。

「少し嬉しそうに。

ミネルヴァとしては『素晴らしい事を思いついたわ』と言うほど盛り上がっているが、例のごとく、少しテンションが上がった程度にしか聞こえない」  
そうだわ。貴方も手伝ってくださる？」

SE18 ミネルヴァが、主人公のスカートをめくる音2

【最初から最後まで流す】

●正面 下 50センチ

「穏やかに嬉しそうに。

主人公に、ドレスの裾を自分で咥えるように指示する。

心から『我ながら名案だわ。こうすれば、私は人間の方の手も両方使えるし、主人公さんのお顔もしっかり見えるもの』と思っているので。

しかし同様の事をするならば、植物の手にもっと手伝ってもらい、スカートを持たせればいいだけの話である。

ミネルヴァは無意識のうちに『主人公さんをもっと恥ずかしい気分させたい』『彼女をもっと深く、でも、痛みなく支配したい』と思っている。

しかし、その結果がこの行動だと気づいていない」

ほら。こうやってスカートの裾をお口で摘まんで、持ち上げていて頂きたいの。

そうすれば私、貴方のお顔をずっと見ていられるわ。

ね？ お口を開けて？」

〈主人公〉

「んぐっ……」  
♥

その時おとなしく口を開け従順に意地悪されたのは、主人公の嗜好が、夢と一致していたからだ。

つまりところ主人公は貪欲で、愛されながら犯されたい。

被虐心が満たされる。でも、心身は傷つかず尊厳は守られるなどという、実に都合のいいところへ落とされて。『ひどい事をされている風』の行為を楽しみたいのだ。

これもまた、主人公が本当に望んでいたセックスだ。

主人公はこれを、昨日よりもずっと前から知っている。

でも、それをしてくれるのが、初めて恋した相手なのは……いよいよ現実味がなかった。

● 正面 下 50センチ

「穏やかに嬉しそうに。

主人公が素直に従ってくれ、理想通りの構図が仕上がったので。

ドレスの裾を咥えさせられ、涙を流して恨めしげに自分を見る主人公に、激しく欲情しているのて」

ふふっ……ありがとう。

可愛い……その姿、とっても素敵よ。

【※3回※ 性器を舐める。

本格的に主人公をイかせようとしている感じで。

夢の中の植物に対抗しようと、頑張っている感じで」

んっふふ……♡

んっ……♡

んっく……♡

【※3回※ 呼吸する。

早くて荒めの、興奮気味の呼吸】

ふーっ、ふーっ、ふーっ……。

【少し間をあけてから。

うつとりと嬉しそうに。

無意識のうちに『あえて宣言する事で、さらに主人公さんの羞恥心をあおろう』と思っている。だがこれに気づかず、医療行為をする時と同じような『これから何をするか、あらかじめきちんと伝える』行為と同じだと捉えている」

……舌を入れるわね」

〈主人公〉

「ああっ……♡」

こうして、主人公はまた突き落とされた。

何もしていないのにひたすらに愛され、快樂と喜びだけを与えられる、不条理の極みのような世界に。

●正面 下 50センチ

「【※しばらく※】 性器に舌を挿入して舐める。

丁寧に入り口から、主人公の反応をうかがいながら。

でも容赦なく、ぐちゅぐちゅ音を立てて舐める。

さきほどの言葉通り愛液の味を楽しみながら、少しでも主人公を気持ちよくしよう、あ

の植物に勝とうという意志で舐めていく。

両手で主人公のお尻を包んで固定した状態で舐めているので、密着感が強い】

んんんつくっ……んっ♡

んんんう……ちゅぽっ♡

ちゅぽっ♡　ちゅぽっ♡　ちゅぽっ♡

【※3回※　呼吸する。

早くて荒めの、興奮気味の呼吸】

はーふーっ、はーっふーっ。はーふうっ……♡

【※しばらく※　性器に舌を挿入して舐める。

等間隔に、似たようなペースで、しっかり舌を深く入れる形で出し入れする。

両手で主人公のお尻を包んで固定した状態で舐めているので、密着感が強い】

んっ……じゅぽっ♡

じゅぽっ、じゅぽっ♡　くぽっ♡

くぽっ。くぽっ。くぽっ♡

ぴちやっ、ぴちやっ、ぴちやっ♡

【うっとりとした素直な感想を述べる。

舐めるのも挿入するのも初めてではないが、また味が変わっているような気がする、主人公の身体の中に、また新しい『美味しいもの』を見つけたような気分で】

はあ……貴方の中、熱くて、とろとろ……♡

【※また性器に口をつけながら※ 話す】

はんむ……火傷してしまいそう。

【※しばらく※ 性器に舌を挿入して舐める。

最初は等間隔に、だんだん不規則なペースで、しっかり舌を深く入れる形で出し入れする。

主人公の反応を見ながら、適宜出し入れの速度や角度を変えているイメージで。両手で主人公のお尻を包んで固定した状態で舐めているので、密着感が強い

ちゅっ♡

ずるっ……♡ ずるっ♡

ぐちやつ、じゅぱっ、じゅぱっ♡

ぐちっ♡ ぐちっ♡ ぐちっ♡ ぐちっ♡ ぐちっ♡

ぐちゅっ♡

んんんっふ……ぐちゅっ♡

じゅぷっ♡ じゅぷっ♡

ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡

【※3回※ 呼吸する。

かなり早く荒めの、興奮気味の呼吸】

はーふうっ、はーふうっ、はーふうっ ♡

【※しばらく※ 性器に舌を挿入して舐める。

追い込みをかけるように激しく舐めて出し入れする。

『このやり方で間違いないみたい』と確信し、一気に攻めていくイメージで。両手で主人公のお尻を包んで固定した状態で舐めているので、密着感が強い】

んれれれれれ……じゅぽおっ ♡

んっふ、んっふ、んっふ。

ずちゅっ ♡ ずちゅっ ♡ ずちゅっ ♡

じゅるるるるっ……じゅるっ ♡

〈主人公〉

「んーっ…… ♡ んーっ。 んんんうっ…… ♡」

そんな世界でもがきながら。そのくせ、少しでも長く滞在したいとずうずうしくも思いながら。

主人公は、もう達しそうな事を訴える。

スカートの裾を破らないように、でも離さないようにと必死で啜えながら、何とか思いを口にしようとする。

むろん、ミネルヴァの言う事を素直に聞き続ける必要はない。

彼女もそこまで強く強制したつもりはないだろうし、もし、こうしているのがつらかったり、恥ずかしかったりするならすぐにやめていいとさえ言ってくれそうだ。

だから、もしそうなら。

主人公は今すぐ口からスカートを離して、ミネルヴァから顔を隠せば。蔓の方の彼女がすぐにケアをしてくれ、役目を交代してくれるだろう。

なのにそうしないのは、こういう事をされてみたかったからだ。

自由に身動きが取れないどころか、発言も、呼吸すら制限された状態でイカされる。

主人公はずっと、そういうのをしてみたくて。だからあんな夢を見ていたからだ。それを彼女がしてくれるなら、こんなにも嬉しい事はないからだ。

## ●正面 下 50センチ

「【穏やかに嬉しそうに。

『あら、もう達してしまうの？ 早いね』と聞いている」

ひやら……ふおおたっひてひまうの？

はひゃいのね。

【※舐めながら話すせいで、聞き取りにくくなる※

『残念…… ♡ ずっとでもして差し上げたかったのに』と言っている。

『残念』とは言っているが実際は『妥当な所でしょよね。昨日の行為の様子からしても、そろそろこの辺りが限界でしよう』と思っている。

無論、煽る気は全くない。

また、舐めながら話す。

両手で主人公のお尻を包んで固定した状態で舐めているので、密着感が強い】

ひゃんへん……♡ ずっほれも、ひて差し上げたかったのに。

んっく……♡

可愛い方（かた）……いいわ。存分に良くなって頂戴ね……♡

【※しばらく※ 性器に舌を挿入して舐める。

ねっとり音を立てて、主人公の膣の気持ちいいところを舌でゆっくり往復するイメージで。

両手で主人公のお尻を包んで固定した状態で舐めているので、密着感が強い】

んっ……ぱちゅっ♡

ぬちゅっ♡ ぬちゅっ♡ ぬちゅちゅっ♡

【※3回※ 鼻呼吸する。

ミネルヴァにしては珍しいほどの、とても荒い呼吸】

ふーはあ、ふーはあ、ふーはあ♡

【※6回※ 性器に舌を挿入して舐める。

本格的に主人公をイかせようとしている感じで。

丹念に舐めながら気持ちよくして、主人公が絶頂するための助走をつけるイメージで。両手で主人公のお尻を包んで固定した状態で舐めているので、密着感が強い」

れるれる……れるれる……れるれるっ♡

んっ♡ んっ♡ んっ♡

【苦しそうに、いったん離す。

夢中になりすぎたせいで、いつのまにか予想外なほど呼吸が苦しくなっていたので」  
んうっ……♡

【※3回※ 鼻呼吸する。

ミネルヴァにしては珍しいほどの、とても荒い呼吸」  
はーすう、はーすう、はーすう♡」

〈主人公〉

「ん♡ んんんう♡ んーっ♡」

●正面 下 50センチ

「【※舐めながら話すせいで、聞き取りにくくなる※

『ええ……どうぞ。達して頂戴。気持ちいい所、私に見せて?』と言っている。

先程の主人公の反応を受けて。

両手で主人公のお尻を包んで固定した状態で舐めているので、密着感が強い」  
ええ……どうひよ。

たっひてひょうらい。

きもひいい所、わたひにみへて？

【※1回※ 性器にキスする。

わざとらしく音を立てる、ちゅぽっと音のする、甘々なキス】

ちゅっ♡

【※しばらく※ 性器に舌を挿入して舐める。

本格的に主人公をイかせようとしている感じで。

丹念にしっかり舐めて、出し入れして、主人公の反応を見ながらだんだんペースを上げていくイメージで。

両手で主人公のお尻を包んで固定した状態で舐めているので、密着感が強い」

ちゅばちゅば、ちゅばちゅば、ちゅばちゅば、ちゅばちゅば♡

じゅっぽ、じゅっぽ、じゅっぽ、じゅっぽ。

ずろろっ……じゅろっ♡

んっふ、んっふ、んっふ、んっく♡」

〈主人公〉

「んーんっ♡ んー♡ んんんう♡ んーっ……♡」

そして主人公は、また蔓の彼女の手を握る。

犯されたい、ひどくされたい、意地悪されたいと言いながら、最後には甘えて、ホツとした心地で絶頂したい。

そんな、あまりにもわがまますぎる願いを叶えてほしくて、その手に手を深く絡めた。

● 正面 下 50センチ

「【※もうすぐ、主人公が絶頂する※

※しばらく※ 性器に舌を挿入して舐める。

進むにつれ『少し苦しそう』から『かなり苦しそう』になっていく。

激しくたっぷり出し入れて、しっかり攻める。

自分から舐めている以上自分でペースの調節もできるのに、しない。

ただ『主人公さんを気持ちよくさせる』事だけに集中して、自分の事を忘れているので、両手で主人公のお尻を包んで固定した状態で舐めているので、密着感が強い」

んっ……♡

んーっ……♡

ずろっ……♡ ずろろろろっ♡

ずろっ♡

ちゅぱっ♡ ちゅぱっ♡ ちゅぱっ♡

ぐちっ♡ ぐちっ、ぐちっ、ぐちっ♡

ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡

んんんっふ……くちゅっ♡

じゅぶっ♡ じゅぶっ♡ ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡

んんんんうっ、んーっ……♡

【※ここで主人公が絶頂する※】

自分も喘いでいるようになる。

ものすごく苦しい中、お尻をつかんでもなお主人公が逃げようとするので、それを押さえつけようとすると、もっと苦しくなるので」

ふううううっ……♡」

SE19 蔓がしなる音3

【最初から最後まで流す】

【0―1秒ほど流して、次の『ミネルヴァ』のセリフと重ねて流す】

あまりにも深い絶頂とともに、手首を結ぶ蔓が、ぎりり、としなる。それでも彼女はひるむ事なく主人公を受け止め、支え、抱きしめる。

主人公はそれに申し訳なくも、とても安心してしまつて……ぐったりと目を閉じた。

ミネルヴァ『正面30センチ』までいったん離れる。

●正面 30センチ

「【※10回※ 呼吸する。

とても荒いが、うっとりとした、幸せそうな呼吸。

だんだん、少しずつゆっくりになって、整つていく】

はーすう、はーすう、はーすう、はーすう……♡

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、はあ……。

【※苦しそうな呼吸のまま※

心底嬉しそうに。

『合つて』いなくとも、主人公がとても気持ちよくなつてくれたらしい事がわかるので

ふふふっ……♡

可愛い……♡」

ミネルヴァ 『正面30センチ』から『正面0センチ』まで移動して、キスする。

●正面 0センチ

「※1回※ キスする。

愛情を込めた、甘々なキス」

ちゅっ♡

【普段通りのようで、どこか勝ち誇ったような声で。

これを宣言し、かつ主人公に実感させない事には、夢の中の植物に勝った事にはなら  
ないで】

夢の中より気持ちよくなれたわね♡」

今にも意識を手放しそうな主人公のすぐそばで、ミネルヴァが珍しいくらい感情のある、  
勝ち誇ったような声を漏らす。

●正面 0センチ

「※3回※ キスする。

愛情を込めた、甘々なキス。

勝負に勝った事を確信し、余裕ができたので」

ちゅ ♡ ちゅ ♡ ちゅ ♡

【※6回※ 呼吸する。

荒いが、うっとりとした、幸せそうな呼吸。

だんだんゆっくりになっていく」

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、ふうっ……」

ミネルヴァ、『正面0センチ』の距離のまま『無声音ささやき』をする。

●正面 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「【とても嬉しそうに。

秘密を打ち明けるように言う】

……あのね、今わかったわ。

聞いてくれる？

【とても嬉しそうに。

秘密を打ち明けるように言う。

『好き』と言う気持ちは自覚したが、自分のそれが、嫉妬や自己犠牲も絡むような、も

つと重いものだという自覚はまだないので」  
私ね。

……貴方の事が、大好きみたい」※

だから主人公が驚いて、思わず目を開けると……。

ミネルヴァが、夢のような事を言うから。

主人公はもう、ここは夢の世界なのだと思って、キスを受け入れた。

●正面 0センチ 『無声音』 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「※1回※ キスする。

愛情を込めた、甘々なキス」

ちゅっ♥」※

ここでフェードアウトして終了。